委託事業実施内容報告書

平成23年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【ボランティアを対象とした実践的研修】

受託団体名　財団法人神戸キリスト教女子青年会

1　事業の趣旨・目的

この講座は、都市部よりも研修の機会が少ない明石市で開催し、地域で活動を続けている明石市国際交流協会のバックアップを得て、地方で活動するボランティアのスキルアップを行うアウトリーチ事業として開催した。

日本語ボランティアはある程度の入門講座を受けて、日本語を国語ではなく日本語としてみる、という意識を持つことができれば、資格としてはすぐにも始められるが、実は実際に始めてから様々な問題にぶち当たることが多い。それぞれの学習者のニーズに合った教え方、日本語文法の考え方などはもちろんのこと、どのようにして話せるまでに持っていくかというプロセスさえも自信がなくなっていくものである。この講座はそのようなボランティアを対象に、彼らの経験を土台に、より効果的に学習者に役に立つ指導法を学び直すことを目的としている。また、指導法に限らず、学習者への対応や教室運営、他のボランティアとの協働作業を体験することによって、現在個々が抱えている問題の解決をはかることも目的としている。これらの活動を通じて、その地域に生活する外国人が日本で暮らすための支援をしたいと考える。

2　運営委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
6月3日	明石国際交流協会	長野修三 久保美和 掛橋智佳子 奥未知留 斎藤明子 服部とし子	実施要綱の作成	・日程の確認 ・実施場所の確認 ・広報 ・内容
9月30日	神戸YWCA学院	掛橋智佳子 奥未知留 斎藤明子 服部とし子 福井武司	カリキュラム検討	・カリキュラム検討 ・補助の仕事内容の確認 ・授業準備の段取り
11月4日	神戸YWCA	掛橋智佳子	運営の確認	・授業進捗状況の確認

	学院	奥未知留 斎藤明子 服部とし子 福井武司		・実習のための準備（学習者関連）
12月9日	明石国際交流協会	長野修三 久保美和 掛橋智佳子 奥未知留 斎藤明子 服部とし子	総括	・講座の振り返り ・アンケート結果の検討 ・今後に向けて

【写真】

3　講座の内容について

（1）　講座名

日本語ボランティアのためのスキルアップ講座

（2）　目標

・ボランティア日本語支援を経験したボランティアの抱えている問題を解決するために、具体的で実践的な日本語指導法、さまざまな学習者への対応、教室の運営、ボランティア仲間との協同の方法を学ぶ。

・コース全体は、3部で構成され、講座で学んだ知識が実際の授業に結びつくことを目的としたカリキュラムを組み立てた。具体的には、講義、講師による授業の見学、実習、及び実際にボランティアが担当している学習者への授業を講師・参加者が観察をして、アドバイスを行うこと、また受講者同士の内省、工夫などの共有などである。
講義で取り上げたレベルは、主にゼロ初級、初級前期など。在留外国人の社会的背景の認識を得るための内容も含む。

・このようなさまざまなアプローチから、ボランティアの教えるための意識の変革を求め、それを受講者で共有することを目標とした。

（3）　受講者の総数　　21　　人（延べ人数ではなく，受講した人数を記載すること。）

（出身・国籍別内訳　日本人21人）　　）

（4）　開催時間数（回数）　30　時間　（　10　回）

講義　12　　時間　（　4　　回）　実習　　18　　時間　（　6　　回）

（5）　参加対象者の要件

日本語ボランティア経験者およびコーディネーター経験者

（6） 受講者の募集方法

① ちらしを以下の配布先に 8 月末配布。
明石市コミュニティーセンター、明石市市民センター（3 か所）、明石市サービスコーナー、三木市 加古川市 稲美市各国際交流協会、神戸YWCA学院

② 明石市国際交流協会メルマガに配信。

③ 神戸YWCAのHPにアップする。

④ 明石市広報、 9 月 1 日号に掲載。

（7） 会場

ア 講義、 イ 実習 ともに 明石市生涯学習センター、あかし男女共同参画センター

（7） 使用した教材・リソース

『みんなの日本語Ⅰ』スリーエーネットワーク
『おしゃべりの種』スリーエーネットワーク
『日本語宝船』アスク
『日本語集中トレーニング』アスク
『初級日本事情』スリーエーネットワーク
『話題カード』神戸YWCA
『ストーリーで覚える漢字 300』くろしお出版

（9） 講座内容

日時	講座名／学習内容	講師	受講者数
10 月 7 日(金) 1:30～4:30	日本語教育の考え方	神戸女学院大学講師 神戸YWCA講師 斎藤明子	18名
10月14日(金) 1:30～4:30	授業の流れの確認	神戸女学院大学講師 神戸YWCA講師 斎藤明子	15名
10月21日(金) 1:30～4:30	模擬授業実施（1）	神戸女学院大学講師 神戸YWCA講師 斎藤明子	16名
10月28日(金) 1:30～4:30	模擬授業実施（2）	神戸YWCA講師 奥未知留	16名

11月4日(金) 1:30～4:30	異文化理解	大阪産業大学講師 北村広美	16
11月11日(金) 1:30～4:30	授業見学	神戸女学院大学講師 神戸YWCA講師 斎藤明子	17
11月18日(金) 1:30～4:30	実習(1)	神戸女学院大学講師 神戸YWCA講師 斎藤明子	17
11月25日(金) 1:30～4:30	実習(2)	神戸YWCA講師 奥未知留	15
12月2日(金) 1:30～4:30	会話の進め方(1) 現状の課題(1)	神戸女学院大学講師 神戸YWCA講師 斎藤明子	14
12月9日(金) 1:30～4:30	会話の進め方(2) 現状の課題(2) 講座の振り返り	神戸女学院大学講師 神戸YWCA講師 斎藤明子	17

(10) 講座の評価

① 受講生に対するアンケート

アンケート集計結果を参照。

② 実施主体からの研修内容結果評価

・ ボランティアに意識の変化が現れ、教え方が違ってきた。言葉を教えることのゴールが意識できるようになったことにより、学習者との生き生きとした談話が増え、やりとりが明るくなった。実際に教室で応用したところ、学習者の充実感を感じとれるようになったとの報告も受けた。

・ いろいろな教材を知り、それを活用する意味を学んだ。そして、より効果的な教え方が習得できた。そして、学習者のための自律学習への道筋も考える機会になった。

・ボランティア同士で経験を共有し、ともに学びあう姿勢が生まれ、連携ができるようになった。一人で悩まずともに相談できる関係ができていった。自分たちで問題点を見据え洗い出し、今後外国人支援はどうすればよいかを考え始めた。

・ボランティア教室はともすれば、一つの教室で完結し同地域にあるほかの教室ボランティアとの情報交換や、事例研究などはあまり活発ではない。これは一つの教室でも同様で、曜日が異なればボランティア同士の交流はあまり盛んではない。

この講座では違う教室からの、また異なる曜日の受講生がともに学んだことによって、ボランティア同士が互いに刺激を受けあい成長できるチャンスが生まれた。このような交流による成果から、神戸YWCAとしては、地域の日本語学習ひいては外国人支援体制の一つの方向性が見いだせたと考える。またこれらにより、地域の核の作成に貢献できたことなど、意義深い経験を得る機会となった。

・ この講座は神戸YWCAが存在する神戸市ではなく、明石市国際交流協会のある明石市に場所を移して行った。明石市交流協会の日本語ボランティア教室と連携することにより、その地域に密着した講座を行うことができた。ボランティア個人個人が参加する形式の講座ではなく、その地域のボランティア教室ぐるみで行う講座方式は、地域全体を巻き込み非常に効果が高いと言えるだろう。

③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

明石市国際交流協会との連携により、その地域で活動するボランティアに意識の変化が現れた。この経験を生かして他の地域においても同様の活動を続けていくことを考えたい。日本語ボランティア教室で、何が目的とされ、何が必要かを認識したうえでの支援体制を共に考える形の講座を、今後も続けて行きたい。

（11） 事業の成果

① 他事業との連携

ひょうご多文化共生センター

在留外国人の背景を学んだことにより、求められているものが言葉を教えるだけのボランティアではなく、生活支援を含んだものであることを考える視点を得た。

② 研修後の人材活用

・講座受講者が核になって、ともすれば個人作業に陥りがちな日本語教室のあり方を、共に共有し刺激しあう関係に変化させていくこと。

新しくボランティアを始める人へ得た考え方を伝えていく役目を担う。

（12） 今後の課題

今回の講座では、予測した通り、日本語支援を始めたものの悩みが多いという実態がよくわかった。例えば、テキストはどんどん進んでいくが学習者が話せるようにならない、ボランティア講座を受けたものの自分の教え方がいいのかどうかいつも悩む、また、学習者が楽しそうじゃないしよく休む、などがあげられる。

ボランティア教室の運営において、それらの悩みを共通のものとし協働して解決していく体制づくりが急務であることも認識できた。それには定期的なアドバイスを行うシステムが必要である。今後はそのような形での働きを模索したい。

また、講座で今回とり上げたのは初級の教え方だったが、さまざまなレベルやニーズが必要とされている。生活ができる日本語レベルを目指すことからより進んで、仕事に結びつくまでの指導ができることも必要になる。年少者の学習者も増えている。日常会話ではなく、学習言語が使えるようになることも要求されるだろう。このようなニーズに応えるためにも、上記の日本語教師による定期的なアドバイスの体制が有効だと思われる。